

# 現代文学が語るもの 帚木蓬生『臓器農場』論

増 満 圭 子

## 要 旨

我が国で初めて脳死者からの臓器移植が行われ七年が経過している。しかし平成五年に既に発表されていた帚木蓬生『臓器農場』には、その臓器移植が重いテーマとして表されていた。科学の進歩は当然人間にとって好ましいことである一方、その科学は逆に人間や自然そのものをじゅうりんし、拘束し、何か不自然な方向に迷い込ませる危険性をもはらんでいる。それを『臓器農場』は描き出し、移植医療の根源に存在するものが、決して命への尊厳や救命医療だけでない現実を、我々読者に対して重く警告していた。文学に込められた可能性をわれわれが改めて認識できる作品と言えるだろう。

## はじめに

「臓器移植に関する法律」(平成九年七月十六日成立)施行(同年十月十六日)後約三年を経た平成十一年二月、高知赤十字病院において、我が国初の脳死者からの臓器移植が行われた。<sup>(一)</sup> 以来すでに六年余が経過し、医学的判定に基づく「脳死」概念がわが国に定着、移植医療が静かに稼動し続けている。

初めて臓器移植が行われた当時、摘出された臓器は警察の先導で

次々と移植を待ちうける患者の元へと運ばれた。全てテレビ中継のもと手術室の状況も微細に公開されていた。「透明性」への配慮であった。けれどもこの時ドナー周辺のプライバシーまでもが詳細に報道されたことこの反省から、以後この種の報道はあまり取り上げられることはない。

しかし、それほどにも厳かで、ある意味では極めて大げさで又異様でもあった騒動を見た当時でも、奇妙にも、それが既に遠き過去の回想シーンではないかという錯覚に陥ってしまったほど、それ以前に

すでに触れていた小説『臓器農場』との出会いは衝撃的なものだった。日々躍進を遂げつつある医学、それは人間の生命それ自体に関わる極めて重く、責任ある分野ではあるが、その生命の尊厳について既に文学は静かに問うていたのである。

臓器医療が進行しつつある現在、改めてこの作品を、特に、読者側の「読む」という行為を中心視点として捉えたい。それは、本来の文学論的読みとしてばかりでなく、そこからどのように読者の意識が喚起され、どう問題化されて行くかという、いわば現代小説に対峙する読者論としての呈示にもなるであろう。更には、描かれた作品世界と現代とを対照的に捉えた上で、改めてこの現代における文学の在り方をも考察する。

作品に描かれた心情や作者の心理を問いかけようとするよりも、全く逆の方向から読者側の心理を中心に作品を読み進めていく。読者の目が作品に、どう吸収されていくかを考察することで、今日における文学の在り方というものも自ずと見えてくるであろう。

## 一 もう一つの現代

### 異空間社会への誘い

帚木蓬生<sup>(三)</sup>『臓器農場』は平成五年に新潮社から発表された長編小説である。題名の通り臓器移植をその中心テーマとし、そこに一種サスペンシブ的趣向が織り交ぜられている。

作品はまずその冒頭部、新人看護婦天岸規子の出勤風景から始まる。就職先聖礼病院への勤務初日、主人公の慌ただしい朝の場面には、これから始まるこの作が、ごく普通の青春小説にありがちな、新人成長物語かと思える明るさと微笑まじさがある。朝の住宅街を走り出す規子の描写が、読者側の作品世界への介入をいとも簡単に遂げている。

しかし作品冒頭で読者は、そんな日常風景に思わずはっとさせられる一言が、実にさり気なく語られているのに度肝を抜く。「ノリコの病院のことが新聞にのっているよ」との母親の指摘に規子は「多臓器移植に成功——聖礼病院で」という見出しが眼に入る。恐らくこの「多臓器移植」という言葉など作中では奇異なものではないだろう。規子には別段驚いた様子もない。読者はまずこの段階で戸惑い始めるに違いない。改めて確認してみれば、この作品は平成五年に発表されている。「脳死」という概念どころか、移植それ自体が、まだ一般の人々には耳慣れない言葉だった時代である。ところが作品世界では、それが極めて平易な日常に、新聞の「小さな記事」で扱われる。一体この作品はいつの時代のものなのか。フィクション世界とは知りながら、思わずそう勘ぐりたくなるほどに、「移植」という語は作中の、通常の日常生活の中にある。

しかし、読者のとまどいは、ただそれだけに留まらない。作品は、更に次の段階で決定的なことを明らかにする。それは、新人看護婦達のいわゆる「入社式」としてのセレモニーにおいて病院長訓辞の中に示されていた。「今朝の新聞を読んだ人、手をあげて」という院長の問

いかけに対する、「脳死の赤ん坊から臓器を取り出して移植した記事だったように思います」「あとは肺臓と角膜です」「心臓と肺は同じ患者に移され、角膜と腎臓はひとつ別の患者に移植されたので、全部で六人の患者が恩恵を受けたことになります」との新人たちの発言である。

臓器移植、しかも赤ん坊からの臓器移植が、この聖礼病院では日常的に行われているらしい。院長の言葉は「患者さんの苦痛を少なくするために最先端の医療を提供するのが、私たちの使命です」と如何にも自信に満ちあふれ誇らしげにさえ思われる。この作中社会では、もはや脳死体からの臓器移植に基づいた移植医療体制が確実に整備されている。しかも、現在の我が国では、法が固く規制して未だ対象外である「六歳以下の子ども」についても、大人との区別なく全く同等に脳死移植がおこなわれているらしい。

すなわち読者はこの段階で、この作品に描かれている社会が、我々の住む現代の状況とは、全く異なることを察知する。そして改めて、作品のその虚構性に安堵するのでもあるが、それではこの作品世界に示された（虚構的）社会状況は、脳死にどのような基準を設けているのか。

現在、我が国の脳死判定は、臓器移植法が定める脳死判定基準に基づいて、慎重に繰り返されているという。この移植法が制定されるまで（又、今現在に至っても、通常医療の現場では）、「心臓停止」が「死」を意味する。けれどもこの作品社会では、「脳死」は極めて曖昧なもの

らしい。少なくとも現在施行されているような、法に基づく規制などどうやらここには存在せず、各医療機関の裁量に拠っている。それを具体的に示すのは、作中、正義心の強い医師の日記に、「もともと脳死は複雑な問題を孕んでいる」「脳死判定のガイドラインも、各病院で微妙に異なっている。まして乳幼児となると、判定の難しさは大人の比ではない」と記されている箇所であり、又「聖礼病院の脳死判定は、それら全ての難点を考慮して独自の基準を設けていた」という記述もある。病院ごとに異なる脳死基準を全て補うような完全な「基準」がこの聖礼病院にはある、というのである。それは裏を返せばそれぞれの病院独自の基準が如何に曖昧で、「脳死」イコール「死」という関係が極めて疑わしいものだと示している。

作品内に描かれる社会構造は、こうした脳死判定基準から、現在の我々が存在するのは明らかに別の仮想空間の、極めて特殊な社会であることをここで読者は改めて認識する。

### 病院のある位置 下界と天空の中間点

さて、作品の舞台となっているその聖礼病院は、「山の中腹」に位置している。山にはケープブルカーが麓から山頂公園までのび、規子はそれで通勤する。作中には、そのケープブルカーからの四季折々の景色や自然のみずみずしい描写が散見されるが、どうもその中腹に「病院」とは何か奇異なようでもある。しかしこれは決して単なる設定の甘さ

や、ノスタルジックな風景描写を目的とした演出などでなく、むしろ作品が進行するに従って、この地理的空間が、如何に重要な意味を有するものが明らかにされてくる。

この聖礼病院は、山の麓に広がる俗世間である「町」と、「山頂」との中間点にある。様々な人間関係が渦巻き、日常が絶え間なく繰り広げられる巷の世間を下に見て、それとはかなり隔たった、高い位置に<sup>〃</sup>建つて<sup>〃</sup>いる。そしてケーブルカーは、その中間点である聖礼病院最寄りの駅を越え、更に山頂へと続いていくのである。ケーブルカーの終点の「山頂駅」は、ごく普通の観光場の風景で、展望台があり、公園や広場もある。観光客相手に建てられたレストランからも山の斜面が一望出来、日常の忙しさを忘れくつろぎを得られる場所となっている。

規子は作品の前半でその山頂を訪れるが、まずはこの山頂こそが、俗界の、日常性を離脱した、一種のパラダイスの要素を持つ場所、天空にもっとも近い高地にあることを押さえておく必要がある。もっとも天に近接した場所、そこから遙かに見渡せる空は、死によって導かれる別世界を意味しているとも可能だろう。死へと続く階段の入り口のように受け取れる。すると、「天」が山頂で、「地」である世間が麓に広がる町となり、中間点に位置する病院の意味も自ずと解かれ来る。規子がこの山頂のレストランで昼食をとったとき、ウエイトレスは山で自殺者が多いことを口にするのだが、「一年に十人近くあるのではないですか」もちろん全部新聞記事になるわけではあ

りません」というその言葉には、俗世間からやってきて、まさに死の入り口をこの山頂に求めた自殺者が、やがて遙か天空の本の死の世界へと旅立つその経路が示されているともいえるだろう。

病院から山道を登る途中で突然広がる風景、「樹齢は推定五百年」、「直径二メートル近い巨木」という周囲の美しい光景も、やはり俗界の日常から離れた位置にある、「天」に近き場であって、その象徴とも読める。しかも桜の傍にある「天目池」という池も、「天」という言葉が、この地の特殊性を強めている。生ある者が病院へ向かうのは、病み、傷ついた身体をいやそうとするため、多くの場合、やがて彼らは回復し、再びその病院を後にして社会生活に復帰する。けれどもごく一部の者達は、治療の甲斐なく再び世間には帰らない。そうしたごく当たり前の意味からも、作品舞台の聖礼病院が、俗世間である「生」の場（山の麓にある世間）と、「死」の世界（山の頂上から上る天）との中継点であり、極めて象徴的意味を有しているといえるだろう。

#### ケーブルカー車掌・藤野という青年

先にも言及したように、この聖礼病院と山麓の町を結ぶのに重要な役割を担っているのがケーブルカーである。病院に勤務する職員や患者らは、バスや車を利用する者も少なくないというのだが、規子は一貫して通勤にこのケーブルカーを利用する。

ケーブルカーの車掌・藤野茂も、天と地（俗世間）とを結ぶ場に、

格好の存在として描かれる。その徹底した仕事ぶりや律儀さは、ある種真面目で融通の利かない人物像を読者にイメージさせていく。そして彼の、「老人には手をかし、座っている若い乗客を無理に立たせて、席をつくって」やるような心優しさも、作品はかなり丁寧で紹介し、読者に印象つけていく。ただ、このように実直な人物として描かれている彼は、実は、「小柄な身体に大きな頭をもつ」という、いわゆる障害者なのであった。先に取り上げたような生真面目さも、そうした自らの障害を、彼が懸命に克服しようとする職業意識であるらしい。毎日の通勤で、次第に言葉を交わすようになり、後には聖札病院に、趣味である模型を持ち込んで、子ども達に披露するようになる藤野が、規子に自らの生い立ちを、次のように語る場面がある。

「ぼくの病気は脊椎が割れて、瘤が出来るものです。生まれたとき、お尻のところも一つ頭が着いているように膨れていたそうです」(略)

「尻のほうの瘤は頭の中にもあって、目に見えないけれど、この子はいずれ馬鹿になるかもしれないと先生に言われたそうです。それで熱が出て、ずっと眠って死んだようになったとき、先生が母にどうするか聞いたそうです」

「何をですか」規子は尋ねる。

「このまま死なせるかどうかです」

藤野の家族は現在は母親一人。父は生まれた子供が障害者と知ったとき、そのまま妻子を捨てて蒸発した。彼はその生い立ちも極めて冷

静に口にする。果たしてそれは障害の為なのか、または寂しさやつらさなどの感情を必死に押し殺しての無理なのか。読者はそれを探り出そうとしながらも、確証を得ることなく、作品を読み進めて行く中で、障害者である藤野への距離を少しずつ狭め、やがて恐らく多くの健常者たちともすれば抱きがちな障害者への一種の偏見を次第に取り払っていく。

障害を背負って生きているこの青年が、こうして俗世間である山麓と、天空へと続く山頂とを結ぶケーブルカーの運行に携わるといふことが、この作品全体に深みを持たせている一つの要素でもあろう。藤野は、完全に俗世間の人間の、野望や欲望とは縁のない、純粹なる精神を有している。だからこそ、日々の職務を忠実にこなし、自ら障害者でありながら弱者を保護しようとする心も持つ。彼は無垢なる心の人として描き出されている。天(死の世界)に近き位置にある山頂と、俗社会である町(生の世界)とを結ぶため、日々運行するケーブルカー、そして、そのケーブルカーに乗務しているのが障害者の車掌藤野という設定は、聖札病院の「臓器農場」が社会の中に存在する位置を的確に示している。ここに作者の巧みな意図があり、読者である我々は、この作品世界が日常の近接位置にはありながら、どこか異空間である印象も、確実に把握していくといえるだろう。

こうしてごく通常の虚構作品は、その虚構性を強く押し出すことにより、読者にある安心感を与える。それにより読者は、躊躇なくむしろ無防備に、作品の中に意識を潜入させて行く。やがて読者は、作者

によって仕組みられたイメージ通りの観念を、意識に固定化してしまうようになる。すなわちこの作品で、読者は知らず知らずに、この作品を、当初脳死移植に疑問を抱いていたような、現実社会との対照や反措定として見るのでなく、単なる虚構世界の娯楽として読み始めているのである。

## 二 医療現場のイメージ―固定化される意識―

この『臓器農場』は、極めて衝撃的な題名から推察出来るように、移植医療を遂行するために、欠かせない材料である「臓器」を、脳死者からの提供だけに頼らずに、舞台となつている聖礼病院の特別病棟で「育」ているという内容の、極めて非現実的作品である。現段階においての臓器提供は、どんなに医療体制が整えられようと、どの場合も偶発的なものにし過ぎない。いわば、交通事故や脳梗塞などにより、ある不特定の人間が「脳死」状態とならない限り、移植のための臓器提供は不可能だ。すると重い疾患を抱え、もはや現代の医療では、移植以外の方法で助かる見込みのない患者らは、(あえて誤解を恐れずに言うならば)「他者の不幸」を待っているともいえるだろう。この極めて合理性に欠けた移植医療の欠点を補うため、聖礼病院で「臓器」は作られていたのだが、そうした医療現場での、それぞれの立場の人間を、作品はどう描出しているか。

更に作品を読み進む。

### 患者―病魔に蝕まれた子どもたち

『入社式』セレモニー終了後、新人看護婦らに配属先が発表された。希望通り小児病棟に決定した天岸規子は、もう一人の新人・塩田美紀と共に婦長に連れられ病棟で挨拶する。そこにはどの新人にも特有の気負いと意欲が描出されている。「あなたたち二人とも小児科志望がかなって良かったわね。子供が好きなんでしょう。でも小児科は辛いことも多いのよ。元氣だった新生児が一晚のうちに亡くなるし、助からない癌患者の子供を見ていると、毎日もらい泣きするわ」彼女らを案内する途中、そう語りかける婦長の言葉は、病院で繰り返されている痛々しい日常が、作中人物だけでなく、読者にも十分に訴えかける。特に、読者が医療について部外者であればあるほどに、ここに描写されている、病魔に蝕まれ罪なく命を落としていく幼子は辛い現実と写るだろう。たとえ、この作品世界が現在の日本社会とは、法律や制度が異なる仮想社会にせよ、こうした病児が今現在もこの世の中に存在しているのは事実である。この作中登場する入院中の病児は痛々しく描写され、同情や悲哀の対象でもある。そこには、病と戦う子供自身の姿だけでなく、彼らに付き添い、時折陰でそっと涙を流す、親たちの疲れ切った姿もあって、それが一層辛い印象を与える。その重篤な病状、背後にはいつも死が潜む。作者はこれらの描写を次々と作品内にちりばめて、読者の同情と憐憫が次第に引き出されてくるのを待っている。そして徐々に、この世界の住人ではない読者にも、これらの

子ども達を助けるために残された、唯一の手段として、移植医療の必要性を訴え続けていく。子供を助ける方法があるのなら、それを選択したいと願う家族の心、その根底にあるものは無償の愛に他ならない。

先にも指摘したように、この作品世界は、子供の脳死も既に認定され、小児医療分野でも、移植医療はごく当たり前の治療方法として世間的にも承認されている仮想社会である。(この作品の描かれた時点では)我が国に一切認められていなかった臓器移植の必要を、作者はこうしてレシピエントの立場を微細に描き出すことにより、ここに提言していたともいえるだろう。

しかし、どんなにこの仮想空間で、脳死移植が社会的公認を得ていても、それは医療現場のみに限られていることで、世論は必ずしも統一されてはいないらしい。作中、ひとりの若い母親が、こんな言葉を漏らしている。「私なんか臓器をもらってまで生きようとは思いません」これは、臓器移植の是非に、個々に存在する相違を示しているとも受け取られ、移植医療に未だ馴染まない読者には、一種の安堵感を与える効果もあるだろう。移植医療受容の問題は、この世界でもまだまだ最終段階では、個々人の判断に任される。

けれども、この母親に、医師は問いかける。「お母さん、それではあなたのお子さんが生まれつきの胆道閉鎖で、通常の手術ではダメ、もう数ヶ月の命だしたらどうされますか」「わが子は先天性の奇形だから程なく死ぬのが天命だと思われませんか」と。こうした医師の言葉に果たして、読者はどう反論することができようか。ここで、「他人の臓

器をもらってまで」と明言していた母親は言葉を失っているのである。「私ならともかく、自分の子供となると――」それは恐らく、読者が改めて自ら問いかけるとまどいでもあるだろう。もし万が一自分の子供が病魔に侵され、死の運命にあることがわかったら、しかも、その我が子を助ける方法として、唯一の手段が臓器移植であることを知ったなら、人はどう動くのか。作者は、病児の実体やその状況に苦しむ親子の姿を克明に描き出しながら、始めは極めて唐突だった移植医療というものの重要性と必然性を、読者の琴線に訴え説得を始める。脳死移植は医療として必要な措置である。不幸な病児らを、何故助けようとはしないのか。作者の克明な描写にはそんな叫びさえ含まれる。こうして、徐々に一人ひとりのレシピエントの側からの、移植医療の必要性の意義を説く。まるで読者に、移植というものが、肯定すべき医療として固定化されることを作者が期待しているかのようである。

けれども、作品はこの段階で、ドナーである脳死者への言及を一切行っていないことに、果たして読者はどれほどまでに気づいているだろう。脳死移植の必然を、知らぬ間に作品世界の中で難なく肯定している読者には、ここでその「脳死」の概念が、極めて曖昧なままに放置されていることなど、もはや気にならなくなっているのかも知れない。作品は、ドナー側に生じる問題が一向に明確化されぬまま、ただ提供される患者側、「恩恵を受ける側」中心の医療体制の姿ばかりを細かに示しているだけである。

## 看護婦

さて作品には、主人公である天岸規子を始めとした、看護職にある多くの人物が描出されている。彼らの存在は、どんな役割を果たすか。

初日の中で院長は次のような言葉を新人看護婦たちにかけていた。「出来るだけ、患者さんのそばにいてあげて下さい」「仕事を終えて帰るとき、今日はどれだけ患者さんのそばにいたか反省してみても満足できるような勤務を、私はみなさんに期待しています」確かにそれは医療のあるべき姿なのだろう。看護という職域の実体が、どれも（医療現場に素人の読者には）尊いものと感じられるように作品は展開していくのである。それは主人公規子らの、新人特有の潑刺とした姿でもあり、いわば青春小説のヒロイン的要素が、ここに作用しているからかも知れない。

もちろん看護職という職域が、全てにおいて「聖」であり、献身である、とばかりは決して作品は示さない。例えば規子が入院患者の一人から「勉強を見て欲しい」という要求をされたとき、「後でね」と返答をしながらも、忙しさから先延ばしにしまったという失敗も作品には描かれる。その時、先輩看護婦から、「後でねとか、ちよっと待つて下さいとかいう言葉は、私達には禁句よ」「一分待つてねとか、十五分後に行きますとかきちんと言わないと駄目。その見通しが立たない場合は、出来ませんと断るのよ」と注意を受ける。作品内には、看護職全てを理想化ばかりせず、その過酷な労働実態やそこに生じるミ

スや怠慢も克明に描いている箇所も見受けられはする。けれども、主人公規子の（看護婦として）成長する姿が作品の主幹のひとつとなっている以上、ある程度の看護職の神聖化、純粹なる看護精神というものを、読者にこれでもかと訴えかけているのは確かである。それだからこそ、作品の後半で明らかになってくる、先輩看護婦・間島の犯した罪さえも、それ自体が犯罪行為ではありながら、救命という精神や、看護という職域のベールによって緩和される効果を与えて行くともいえるだろう。

看護職の実体を、まずはその「聖職」意識についてを前面に押し出していくことで、作品は、その奥に潜む医療現場の実体が生み出しているはずの諸問題、脳死概念の曖昧性や、移植医療行為に対する読者の不安や苛立ちを、自然と緩和させている。患者が重篤であるほど看護従事者に救いを求め、そこから得られる癒しの一瞬に何より心を和ませる。ただその癒しのひとときは、どれも刹那的にしか過ぎず、結局は彼らの不安や苦しみを、何も解決することはないのだが、それでも患者は一瞬の安堵を求める。患者に携わる看護の必要と、献身や奉仕という基本の精神を、新人看護婦に託すことにより、看護職における一つの完成されたイメージを、作品は読者の中に静かに構築して行く。そして読者は難なくそれを受容して作品世界により深く没入を果たして行くのである。

## 医師の使命感

病院という場において誰よりも重要な役割を担うのが、医師の存在である。彼らは、ごく通常の一般的概念からすれば、患者を助けるといふ使命による、尊い行為を職務とする。作中でも救命に対する医師の処置が克明に描かれて、それぞれの場面で全力を尽くす姿が読者に強い印象をもたらしている。「ずっと病気であり続けたい」願いから「尿や吐物の中にわざと血を混ぜたり、縫合した傷を故意に汚くして感染させたり、ひどいになると点滴の中に異物を入れる」自虐的行為に走るといふ、いわゆる「ミュンヒハウゼン症候群」という病気の変形で、自分の娘を病に仕立て上げている母親に対する処置の場面でも、担当医の貞村は、的確且つ迅速な対応を見せている。また、別の病児に対する処置を巡って医師が頭を悩ます場面にも、その使命感は浮き彫りにされている。

それは臨床医療の現場では、当然あるべき姿には違いない。理想的医師の情熱が描かれて、読者は素直に感銘を受けていく。作中では、こうして医療という必然が、医師の使命感によってより補強されている。確かに、「医学というものは一人歩きするものではありません。需要のある方向に進んでいきます。一人の子供がこの世に置き土産をしていった臓器で、他の子供が命を全うできるなんて、すばらしいことです」と語る医長の言葉にも説得力がある。ただ一方では、こうした臨床医療現場は、常にその実践を確立させるため、研究の場としての

性質もその背後にはあるのだろう。もちろん当然のことながら、その研究蓄積がなければ新薬や新療法なども、未だ開発されることはなく、医療全体の前進も望むことすらできぬだろう。しかし時には、必要以上の医師側の向学心・研究心が、あるべき医学の理想とかけ離れた姿となって突出する事実も、近年の例を待たずでもない。

けれども、先に示したような作者の巧みな誘導で、一つの固定されたイメージに、強引にもひきこまれてしまっている読者には、こうして作品の中に示される、医療の背後に潜む恐ろしい部分など、結局は現実とかけ離れた「物語空間」の虚構に過ぎない。多くの矛盾をばらばらにはいるものの、作品全体が患者たちの不幸を前面に押し出している以上、まずは「救命」という名のもとに全てが許容されてしまう医療現場の必然に、読者の心は既にとらわれてしまっている。むしろ読者はこの段階では、そんな虚構の描き出す恐怖などよりも、ただ単に物語の進行に心をひかれているともいえるだろう。作品世界へ心地よく陶酔し、更には、ここから作品内に散りばめられていく数々のサスペンス的展開に好奇心をそそられて、読者の関心は、今度はその事件性の解決へと集中していく。脳死が人の死、であると容認され、既に子供の脳死者からの移植医療さえ日常的に行われているこの仮想社会の設定に、当初はとまどいや反感を抱いていたはずの読者も、患者の悲哀、医療従事者たちの熱意によって暗示をかけられて、医療という必然を許容してしまう。そしてまた、作者によってその関心を、最後までなかなかトリックの明かされない推理展開に向けられて、そこに

新たな陶酔を感じて行く。やがて明らかにされてくるその実体は、恐ろしい医療現場での犯罪でもあるのだが、不思議なことに読者には、それを知らされる段階に至っても、本来問題視されるはずである、医療行為者による犯罪の恐怖性を告発する意識などでなく、むしろ、そこから次第に見えてくる、人間のある愚かさが、かなり強い印象をもつて想起されていく。

すなわち、読者の心理を巧みに誘導しながら作者は、この『臓器農場』で、単なる医療のもつ危険性のみを告発しようとしているのではないのだろう。では、果たして作者の示そうとしているのは何なのか。又読者はそれをどう捉えるか。更に深く掘り下げたい。

### 三 反転する意識

#### 暴かれた実体

作者はこの作品に医療行為の必然を詳細に示す。後半部に進むに従って、この病院に実際に行われている移植医療の実体が極めて衝撃的に明確化されていくのだが、それはどうやら作品の（そして作者の）もつとも告発すべき部分などではないらしい。読者は極めて巧妙なる、作品の示すルートに従って、医療に潜む悪徳を根底から敵対視などせぬままに、作品を読み進めていくのである。もちろん読者である我々が、ここに表されている移植医療の実体に、驚かされるのは確かである。けれどもそれは「移植」行為そのものに対してではないだろう。

むしろ移植という処置は、作中の医療現場で日常的に行われるものであり、読み進めていくうちにその衝撃への感覚を次第に麻痺させている読者には、問われているのが、その是非でなく、小児ドナーの絶対数が不足している問題を解消するために、無脳症児が用いられるという「事件性」であるとの思考を持ち始める。この需要と供給の仕組みに応えようとするための病院側の発想が、読者に強い衝撃を与えていくのである。

実際の医療現場の建前は、あくまでも病魔に冒された人々の命を救うことに存在する。もはや移植によってしか助かる見込みのない患者や家族らが、一縷の望みを託して臓器移植を希望することは、そこでは決して否定されるべきことではない。患者の延命に力を尽くす医師や看護婦らの信念も、尊いものでもあるだろう。けれども、そうした大義により何事も許されてしまうという本末転倒の解釈が、むしろ正当なる倫理観として、当然の如く受け入れられてしまう場合もあることを静かに作品は示している。医療の根本にあるはずの救命行為やその精神がその段階で完全に逆転し、医師らの研究心と名誉欲などの個人的「我」が優先してしまふ。そして医療行為そのものが手段化されて行く。その段階において、医療に対する人間の意識の在り方が完全に反転し、全く逆方向からの探求が、医療という名の下に開始されていく。

作中、自ら移植医として執刀を繰り返しつつ、次第に、「知らされぬ」部分であったドナー存在への疑い深め、調査を開始する場的場という外

科医師が、直接上司に疑問をぶつける場面には、そんな医療従事者側の傲慢さが暴かれる。「小児の肝臓移植をしていて、以前から気がかりだったことがあります。ドナーはどこから来るのかという問題です」、「やはり無脳症児をドナーに使うというのは本当ですか」ストレートに問いかける的場に白谷副院長は、「無脳症児は人間としての条件を満たさない」、「人間ではない」と断言する。作品に解説を記している京都大学医学部の塩田教授によれば、これまでに世界でも実際に、無脳症児がドナーとして用いられていたことが少なからずあったらしい。しかもこの是非に至っては、現医学界においても、未だ倫理的解決を見ていないという。但し何度も言うように、この作品は、決してその無脳児からの移植問題そのものに、是非を問うては、密かに育てる問題化されているのは、そうした無脳児を聖礼病院が「密かに育てていた」事件であり、読者はここでも、この事件性に視点を集中することで、本来現実世界の中で自ら問いかけることの可能な生命の尊厳の問題から、意識を反転させていく。胎生学が専門という貞村医師の研究テーマが、ビタミンAの過剰摂取と奇形児（無脳児）発症の関係にあることが明らかにされるにつれ、作品内で問われる問題は、次第に無脳児の存在や、移植それ自体より、奇形児を実験的に幾体も作り上げているという事実を焦点に移しているのである。しかも、必死に移植を希望する患者らに、医療行為という大儀のもと、多額の金銭でそれを斡旋していく経済装置の存在が、極めて冷酷、且つ非常なものとして告発されている。

現代文学が語るもの 帯木蓬生『臓器農場』

無脳児は密かに作り上げられていた。それが科学によってもたらされる人間の臓器製造所であって、聖礼病院の特別病棟の正体であった。この辺りを読み進め、やっと明らかになった「臓器農場」の真実の姿に衝撃を受けている読者には、ここで今我々が真に問うべきは、問題が、自らの中に微妙にすり替えられて受容されていることに気づけないのではあるまいか。本来移植医療の問題として考えられているように思われた、臓器移植と無脳児の存在との関係が、ここにおいて、一種の経営者側の傲慢に、その焦点を切り替え始めているのである。自然的に発生してしまった無脳児の臓器は、移植としての使用が容認されているという物語事実の是非を問わぬまま、「無脳児」が金銭によって操作され、私腹のために作り上げられていたという衝撃性がより強く「悪」として露呈され、臓器移植そのものの問題は、却ってうやむやにさえなっていく展開が表出されている。そして悪事発覚を恐れている、犯罪者側の心理を克明に描き出すことで、事件を察知した的場や優子殺しなどの、「犯人探し」へと読者意識を巧みに誘導していくのである。

#### 利用されていた善意

改めて作品を問えば、『臓器農場』の作者がもつとも糾弾しようとしているのは、医療の必然性が利用されてしまう現代の、経済優先の社会構造にあるという印象が、次第に強くなっていく。聖礼病院で育て

られていたその無脳児の臓器の数々が希望者に移植され、病院は高額な請求をしていた。ここで問題化されているのは、作中での場が指摘しているように、故意に無脳児を生産し、そのドナー側（正確にいえば、ドナーである無脳児を契約の下に身ごもって出産した母親側）に對しても、提供料という形式の、謝礼が支払われていたという構造、胎児の臓器が、ドナーとレシピエントの双方に、金銭で売買されていたという事件である。その実体が明らかにされるに至って、確かにもつとも糾弾されるべき問題が、臓器「売買」という点に、決定的に切り替えられているといえるだろう。医療現場における全ての悪が、金銭に複雑に絡み込んでいく人間の欲望に収斂されている。

「考えてみれば、このシステムは真相が暴かれない限り、うまく働いている」、「誰も実害を受けず、ドナーの家族もレシピエントの家族も満足し、腕をふるえる場を持つ移植医も、貞村医師のような研究者も喜ぶ。ただ一点、無脳症児という当事者を除いて——」という規子の推察通り、それは金儲けの「手段」なのである。そこで取引していた「物件」が、たまたま無脳児の「臓器」だったに過ぎず、移植医療の是非というものは、ここでは無視されている。ここにおいて「脳死」状態からの移植、または、通常発生する無脳児を提供者とする臓器移植そのものは、何ら否定されてないということを改めて指摘もできるだろう。すると、結局は、貞村の研究も、間島看護婦の過去も、全てが私利私欲からの悪徳商法に利用されていた悲劇として繋げられているような印象すら伺える。

仕事への意欲が純粹であるほどに、それにかける情熱や善意が巧みに利用されて行く社会構造を浮き彫りにして、ただ貞村のような研究心について作者は否定しない。「もっぱら無脳症児をつくりだす研究を一手に引き受けていたらしい」、「いわば基礎的実験の応用」として、貞村はその臓器農場にかかわっていた。彼はただ純粹な研究者の一人にすぎず、そんな彼の研究心さえもむしろ金儲けのために利用された悲劇を負っているものであり、もはや医療関係者の誰に對しても、「悪」としての印象は、否定されている。

また、「臓器農場」の保育器で、無脳児の看護（飼育）担当であった間島看護婦をも、やはり作者は糾弾しようとはしていない。むしろ、彼女が過去に産んだ子が先天的腎臓形成不全で、腎移植以外には助ける方法がなかったにもかかわらず、臓器提供がないために子供を失ってしまった悲劇の女性として設定することで、看護職に忠実なその純粹性をより強調しているとも受け取れる。間島が臓器移植や無脳児の生産に積極的だったのは、そうした過去が彼女に「無脳児を移植のために生まれてきた神の贈り物」だと、見なすようにさせたためなのである。

要するに、この「臓器農場」の中心には金銭最優先の経済構造が存在するのであり、間島や貞村の積極的事件への関与は純粹とも受け取れる彼らの精神が利用されていた結果に過ぎないというものなのである。作者は、こうした真面目で純粹なる人間が、私欲の渦に巻き込まれていく様相を、医療という現場を舞台に描き出している。

読者はこうした作者の意図に巧みに操作され、作品の含有する恐怖や警告の姿など一部見落としたままの状態で、最後まで作品を読み進める。すると全く場違いのように思われる的場医師や看護婦志木優子殺しのいわばサスペンス的展開も、違和感なく受け入れて、むしろ巻き込まれてしまった善意への、憐憫としてさえ受け止めるようになっていく。

「善意」は利用されていた。現代の社会構造は如何なる善意であろうとも、経済装置の中に利用されかねない。そんな現代の恐怖をこの作品は問うているようにさえ思われよう。

#### 四 現代社会への提言

以上みたように、作品を忠実に受け止めようとするならば、そこに見えてくるものは「金銭」優先の人間の私利私欲の世界であり、医療現場もまた福祉や救命の美徳などよりも、まずは経営機関として存在するという、いわゆる経済優先の仕組みである。それが作品に露呈し始めるに従って、当初は、臓器移植という極めて衝撃的な問題に、一種の緊張感さえ抱いていたはずの読者から、次第に「構え」が解消されていく。医学ミステリーとしての面白さを次々と展開させる趣向が、まず読者らを、「考える」よりも「読む」という行為に没入させ、スリルを味わう快楽へと誘った。やがて作品が全ての悪を露呈させ、それを正當に処罰するという結末に至っては、作品は読者らに極めて爽快な読後感さえ与え、本来であれば、重厚な問題を、いわゆる読みの娯

楽の中に置き換えて受容させていた。

けれどもこの作品に潜む問題は、当然のことながら、ただそんな快楽を読者らに、提供するものだけではないだろう。爽快なる読後感の後に、恐らく読者らは、再び冷静なる思考を取り戻し、快楽としての読書行為でなく改めて作品全体を振り返ることになる。その時、読み手の脳裏に浮かび上がって来るものは、この虚構社会で引き起こされていた事件の背後に潜んでいる、現代へと通ずる恐怖である。

まずはこの作品のもつ、極めて巧みなる（ミステリーとしての）娯楽性、いわゆる読みの快楽が、ぐいぐいと読者を引き寄せて、作品世界へと容易に潜入させていく。それがやがて社会問題としても重要な「脳死移植」という難問を、改めて自らや自分の家族の問題として、身近に考え始めるひとつの機会へと変えていく。それがこの作品に潜んでいる実に巧妙なる効果であるともいえないか。作者はミステリーの領域から読者をぐっと引きつけて、作品世界に入り込ませたその後で、あらためて、彼らの脳裏に様々な問題を提起させようとするのである。通常の意識が様々ないいわけによってねじ曲げられ、脳死を当然の如く許容する世界でも発生していた問題が、改めて読者の側に還元され、現代社会の現実を問題化する。その段階において、いわゆる虚構の世界の中に浮遊していたはずの我々の意識は、改めて現代へと帰還する。

ただ単に、いくら「臓器移植」を思っても、それは結局は他者の範疇の、空想領域にしか過ぎない。それを我々は改めて、この露骨なま

での設定で作り上げられた社会を見ることで、恐らく、様々に起こりうるかもしれない問題として具体的に感じるようになる。作品に描かれた死は、医療関係者らの困惑に左右され、どれも淡々と処理される、極めて無機質な事態である。そこには、通常死に直面する本人や家族らが感じ取るであろう感情的悲哀は一切存在していない。死は医療の現場では、単なる事実にしかならず、それを扱う医師や看護婦の本来あるべき善意さえ、一部の悪に利用され、翻弄されてしまっている。作品の娯楽性にのみ目を奪われて、当初はそうした幾つもの「死」を興味半分に読み進めていた読者らも、それがいつか自分にも、必ず訪れることを察知する。その瞬間から忘れていた自らの現実、改めて対峙することを開始するのである。

ではそうした瞬間に、我々読者の側からこの作品を改めて見たときに、見えてくる具体的問題とは何なのか。それが作者によって我々に提起されている真の課題でもあるのだが更に検討してみたい。

### 他者領域としての死生観

まず第一に、この作中、命を根源とする生や死の問題が、それぞれの関係者の側からは、常に自己以外の他者領域にある事実として捉えられている点がある。通常、現在においても「脳死」が論じられるとき、誰もが考えるのは、「ドナーカード」所持の選択、自らに起こり得るかもしれない可能性としての「脳死」である。「臓器を提供する」「し

ない」、及び、その詳細なる意志表示は、現段階では全てドナーカードによって示される。けれどもこの作品に登場する人々で、病魔と戦う患者たちという特殊な状況にある者を除いては、どんなに博愛精神を具えた看護婦も、移植医も、研究者も、また経営者側も、臓器移植に携わる側の全ての人間が、「命」を他者領域として思考する傾向を見せている。彼らは、「生」というもつとも根元的肉體上の問題を、常に自己でない、他者の領域として取り扱う。死に直面している対象は、彼らの意識の中ではいつも「他者」である。

新聞やテレビを通して日常的に報道される事故や事件のニュースから、我々は常に「死」を感じ得る。当然いつかは誰もが死を迎える運命にあることは、自ら十分承知してはいるながらも、しかし殆どの健常なる人間にとって死は、自らの問題としては遠い先にある。死とは、今の時点では完全なる他者の領域にあることを当然のように捉えている。我々は皆「生」の世界を生きている。死に向かって（客観的事実はそうであっても）今我々は死ぬために生きているのではない。「生きるため」に「生きて」いる。だから常に死がとなりあわせにあることが、多くの、いわゆる「健康」な「幸福」人にとっては、観念上は認識していても、決して今の自分に直接かわってくるものではない。そう思うことにすら余裕がある。これは特に医療関係者において、もつとも陥りやすい認識なのであろう。多くの実験が行われ、命を救うための医学にもかかわらず、そのひとつの命を救うために多くの命を犠牲にしているのも決して否定できない。助けられた人間にとっては、

一種の選択された幸運ではあるのだが、その恩恵を受けられなかった多くの命の存在を、医学は決して振り返ることをしない。救命という大義名分を盾に取り、命の犠牲に鈍感になっていることもあるだろう。こうした見方こそが、恐らく医療関係者、特に医師らの陥りやすい問題なのであり、又、ひいては、どんなに近しい親子や兄弟、夫婦でも、命という運命については結局は、個としてのみ存在する絶対の宿命としても解釈できるかもしれない。

では、「死」が、結局そのように他者領域に属するもので、どんなに近い関係にあらうとも、真に共感することは不可能である宿命なら、そこに何の人間的感情も介入させることなく淡々と、全てが医療という下で処理されてしまつて良いものか。タブーとされている人体実験が歴史的にこれまでも様々な形で行われていた顕著な例が示すように、医学という名目の冒瀆的行為には、他者の生命への尊厳を、微塵も感じさせないような冷たさを、常に含んでいるといえるだろう。そこで改めて『臓器農場』をみてみれば、産婦人科に配属された志木優子から、日常的に行われている出産や、墮胎手術の生々しい有様を聞いたとき、親子がふともらす、「不思議なところね、産婦人科というところは墮胎も出産も、同じドクターが行うわけね」、「片方で生命がこの世に生まれ落ちる手助けをしながら、他方で生命の目をつみ取る。同じ人間の内部でその方向を決めるのは、一体何なのだろう」などの感慨からも、それは指摘されている。命はごく簡単に常に操作されている。そんな現実もまた存在する。作品に登場していた貞村医師にみ

られたように、自らの研究心を満足させるべき実験の場として、他者の命の操作を極めて簡単に行つてしまふ医療の危険性の存在を、作品からは読みとることが出来る。一体「生」とは何なのか。

「生命」の起点の問題は、これまでにも様々に論議されているといふ。日本は「優生保護法」の下により、一定の条件下での中絶を許容する。中絶が正当であるという考えは、すなわち胎児は人間ではなく、単なる臓器の一部であるという考えに行き着くことも否めない。実際に昨今のニュースでも、胎児をゴミとして処理していた事件がまだ耳に新しい。また作品内で触れているように、中絶を許容する時期として、胎児の脳が形成され、そこに出現する脳波の存在をもって人の生命開始とするならば、当然脳波の消滅が、死を意味することになる。するとこの作品に取り上げられている無脳児は、当初から脳が存在しないということ、全く「ヒト」としての人間の基礎要因を満たしていないことになる。生体肝移植など、生体からの移植医療が可能なら、無脳児は単なる臓器の一種に過ぎないので、道徳的にも倫理的にも全く問題はないといえるのだろう。中絶の問題と、脳死の問題、更には無脳児の問題は、実際どれも相互に複雑に絡み合っている。

脳死状態に陥つた人間を、移植医療に関して「死」と認めるのであれば、当初からその脳自体が存在していない無脳児の場合は、脳死以前の段階の「臓器」として判断されるものなのか。先にも言及したように、現実問題としても全世界でも、未だその見解は、様々に分かれているといふ。脳死を人の死と認めるなら、無脳児もそれに含まれる

のであるか。作品の中心に据えられた、私欲にまつわる金銭授受を無視して考えとするならば、読者はこれについてどういう見解を示すのか。作品は、先にも示したとおり、現代の社会に巣くう経済至上主義を第一に読者に指摘する一方で、他方、こうして生と死という極めて根本的な問題をも、改めて読者である我々に突きつけてもいるのである。

### 社会的弱者へのまなざし

こうした医療関係者の陥りやすい欠点を、静かに指摘するこの作品の、更に印象的なのは、障害者・藤野茂を社会的に自立させている描写である。登場人物のほとんどが、彼に対して、健常者に対すると同様の接し方をする。

第一章でも指摘したように、藤野は、ケーブルカーの運転士という設定で、忠実にその仕事をこなし、しかも、模型を作る趣味を持つ。彼が親子の紹介で、聖礼病院の小児科病棟へ赴いて、子ども達に模型の汽車を走らせる披露をしたときの状況が描かれる。ここで初め彼に「知恵遅れの障害者」というありがちな先入観をもって接していた人々の、藤野を見る目が変わる。彼の作り上げた模型のすばらしさに人々は皆驚く。この藤野の設定は、障害者の可能性を示す部分としてかなり印象的である。作品の最後に「無脳児も人間です」とつぶやく彼の言葉にも生に対する、真摯で純粹なるまなざしが含まれると言え

るだろう。彼がもつとも生を正面から受け止める役割を果たしている。これは作者自身の障害者への暖かなる視線でもあり、それを作品を通して我々に訴えかけている。

更に作品は、障害児の生まれた家族の在り方をも提起する。この藤野茂は幼少から、母子二人きりの家庭で、父親は我が子が障害者という負い目から家族を捨てたらしい。そんな彼の父親と同様に、(完全に家庭を放棄していかないにせよ)子供の養育の一切を拒否している別の父親の姿も描かれる。それらの状況下、家族や家庭を顧みない生き方も、「父」側の視点として見れば、もちろん一つの意味をなすものかも知れないけれども、作品は障害児に対して「ひるむ」父親と全く対照的に、取り残された母親を、決してわが子を見捨てることなく、その運命に「挑む」ものとして描き出す。子の出生、障害者としての宿命を家族がどう受け止めていくか、そんな家族の問題も、又この作品が問うている現代性のひとつである。

### 『臓器農場』の意義

後半部、警察の介入によって関係者が逮捕され、結ばれるこの作品世界では、事件以後、聖礼病院での臓器移植は一切中止となり、それによって、一見全てが円満に解決を迎えたような結末に至っていく。しかし、また作品は、必ずしもそのような単純なる方法で、あっさりと閉じてしまうには、複雑過ぎる問題も、まだまだいくつも残してい

る。

臓器移植の順番を待ちながら、事件発覚のためにとうとう移植が実現されぬまま、命が尽きてしまった子供の描写を、作者は作品後半で実に丁寧に行っている。

「臓器農場」それ自体は、確実に、悪の発想ではあるにせよ、それを待ち受けるレシピエントたちの存在を考えると、一概に、否定できない現実も確かにここには存在している。経営者や医師の野望に翻弄されていたのは、生まれずにして死していた無脳児たちばかりでなく、重い疾患を抱え移植を待ち受けていた病児たちでもあるのである。

医療行為として、移植を考えようとするならば、この現代社会でも、臓器移植がスタートしている現在、誰もがドナーになる可能性がある。こうしたレシピエントの存在が最後に示すのは、読者にも一度自らの、ドナーとしての可能性を問いかけているからではなからうか。ドナーカードの普及が俣ならず、一旦田満にスタートしているようなこの臓器移植の問題が、このままスムーズに進行しなかったとすれば、やがておそらくどこかの研究者によって、人工心臓や、人工臓器の一種の変形として、こうした作品にあるような生命倫理を越えた臓器開発が考えられないとはいえぬだろう。

科学の介入と進歩とが、命をどこまで蹂躪してしまうのか。少なくとも移植医療による救命は、自然の意図するものではない。自然と救命と、そして倫理とを、我々は自己の中でどう解決したらよいものか。確かに、金ですべてが解決できるなら、どんな値段を払っても、助

かりたい、助けたいと願うのは、人間の本性でもあって、自然なものとはいえるだろう。しかし命を救うための方法は、何事をも許容できるわけではない。人の死すべき運命は、それぞれに長短はあるにせよ、ごく当然の事実なのである。けれども、それを素直に受け入れることを拒否をして、何か自らに都合の良いいいわけを全面的に押し出して、その他の矛盾を一切問題化していない。これも又、移植という問題にかかわる事実でもある。その究極的な形が、すなわちこの作者の示す『臓器農場』なのであり、ここに人間の心の奥に潜む傲慢が、あからさまに表出されているのである。

誰にも生きる力がある。人間には、生きたいという意欲もある。様々な事情から登校拒否や神経症、対人関係恐怖症となってしまう人々でも、何故に彼らをそうさせるかという根底を見つめれば、そこには彼らなりの「生きたい」という願いが存在しているのである。生きたいからこそ、社会生活で自らを苛む困難に苦悩する。生きたいという意欲がなければそのような、他者との関わりに悩むことなど始めから放棄して、どんなに他者から患わされていようとも、一切無関心となるに違いない。けれどもやはり彼らにも、生きたいという願いがある。だからこそこの作品は、そうした「生きたい」人間の根元的力が、他者の領域を侵害してまでも貫こうとして、「臓器」を望む露骨なる姿を示しているのである。

医師でもある作者はこうして「警告」を、既に発していたのかもしれない。それも、我が国で実際に臓器移植が行われる大分以前の段階

で、この現代小説作品に示していたのである。この『臓器農場』という作品をどう読むか、先に具体的に見たようにこの作は、ひとつのテーマを一貫しているように見えながら、多くの問題を含んでいる。

読者である我々は、今こそ改めて臓器移植の実状を考えて、更に、許される限界を見つめ直して見る必要があるだろう、そう作者は訴える。

科学は医療を生み出して、更なる発展を示している。けれども、その根源に存在するのは、決して命への尊厳や救命精神だけでない現実を、この『臓器農場』はこうして描き出しているのである。

### 終わりに―現代小説の可能性

この『臓器農場』について改めて感じられるのは、現代小説が示し得る多くの可能性ではなからうか。活字離れが叫ばれて久しいが、我々は、読みという快樂を通じて、そこに喚起される自らの意識の存在を改めて見直さなければならぬ。通常、作品には、現代を切り取る視点が明らかに存在する。現代を悉く反映し、様々な事件や事象を切り口に、そこから時代を切り取って、その本質を探り出そうとする。それは、文学が「時代を映し出す鏡」であるという、その言葉通りの存在なのである。文学が、それを専門とする人々のいわゆる特権ではなくなっている現在、多くの専門領域の人々が、様々な切り口で描き出している世界を、我々は、決して閉鎖的でなく、おおらかに受け入れることが可能である。しかもそれら専門諸氏の記す作品には、ただ単に世相の反映が含まれているのではなく、この『臓器農場』に示され

ているような、明らかに専門領域から考えられ得る様々な危険性の予告や未来への警告さえ含有されるものだろう。一般に、より明快に、また時には安易過ぎるほどの娯楽性をも伴って、広く小説というものが世に訴えることを開始する。文字を手段とするそれらの表現は、恐らく、読者に特別な警戒を与えぬままの問題提起を可能とする。読者は無防備なままにそれを興味本位に受け入れて、やがて次第にこの本質の重大性に気づいていく。文学の言葉を契機として、幾つもの可能性が示唆される。文学は開かれた場でもある。それは決して、かつてそうであったような、堅苦しい精神性のみを歌い上げていくものではない。我々は、ただ活字を闇雲に忌み嫌ってはならない。様々な形で喚起される息づく言葉の数々を、直に感じ取ることの可能な現代の文学に、もっと積極的に接近して行かねばならぬだろう。文学の言葉が単に、その場だけのものではなく、今や様々な可能性を秘めた「生きた」言葉として活躍する。現代を語る文学の、示唆する様々な可能性を鑑みて、我々は改めて自分自身のあるべき態度を模索して、この現代へと対峙しなければならぬ。『臓器農場』はその意味で、移植医療が改めて問われている現代の絶好の素材でもあるだろう。

### 注

一、臓器の移植に関する法律は、(平成九年七月十六日)法律第一〇四号として、「(目的)第一条この法律は、臓器の移植についての基本理念を定めるとともに、臓器の機能に障害がある者に対し臓器の機能の回復又は付与を目的として行な

われる臓器の移植術（以下単に「移植術」という。）に使用されるための臓器を死体から摘出すること、臓器売買等を禁止すること等につき必要な事項を規定することにより、移植医療の適正な実施に資することを目的とする。」などと定められている。

二、例えば、当時の新聞には、次のように報道されている。

脳死での臓器提供の意思を示し、高知赤十字病院（高知市）に入院していた四〇歳代の患者は二八日午前、臓器移植に基づく二回の脳死判定の結果、最終的に脳死と判定された。同日午後三時過ぎに、臓器の摘出手術が始まり、一九九七年一〇月に臓器移植法が施行されてから初めての脳死臓器移植がはじまった。心臓移植手術は、大阪大学付属病院（大阪市吹田市）で午後七時頃から開始された。

臓器の摘出手術はA移植を実施する阪大や信州大などのスタッフが同病院に集まり、打ち合わせの後の二八日午後三時七分から始まった。摘出された心臓は午後五時半過ぎに、ヘリコプターや飛行機で高知赤十字病院から各病院に向けて搬送された。（一九九三・三・一 朝日新聞より）

三、帚木蓬生（一九四七（昭和二二）年、福岡権生れ。東大仏文卒業後、TBSに勤務ののち九大医学部卒業。七九年『白い夏の墓標』で注目を浴び、九三年『三たびの海峡』で吉川英治文学新人賞を、九五年『閉鎖病棟』で山本周五郎賞を受賞。）

